

有機物が土に還る・堆肥づくり

徳野 雅仁

土が硬いと植物はしっかり根がはれず、土中は酸素や水分が少なく、栄養分も不足した土地になっています。草が生えず、枯れて土に還る有機物がなければ、養分が土に蓄積されないため、このような場所にタネをまいても作物は育ちません。

畑に生やした夏草が繁茂するころ、株元の地面を見ると、土中からはき出されたと見られる団粒状の土が表土を覆いはじめています。刈りとった草をしばらく山積みしておくとその下の表土はいっしょに団粒土に変わっています。いずれもミミズの糞が堆積したものです。植物は枯れると茎葉から根に至るまでミミズや、さまざまな虫やカビ類、微生物によって分解され、分解される際の分泌物によって団粒土が形成され、栄養分を含んだ土がつくられます。森が自らの葉を落として堆積し、豊かな土を生み出しているように、土と植物と小動物、カビ、微生物による共生と営みによって草が育ち、作物が育つ土壌になります。自然界の営みを生かし、養分豊かな土を人為的に再成したものが堆肥で、ヤセ地を生き返らせ、作物を健康に育てる堆肥があれば、野菜づくりの楽しみも増すことでしょう。

堆肥づくりは、大きく分けて、台所から出る野菜くずや茶がら、細かく砕いた卵や貝の殻、魚の骨、海草や残飯を材料に積み込む方法と、畑で刈りとった草や野菜くず、細かく切った木の枝や枯れ葉、米ぬか、もみ殻、

乾燥鶏ふん、油カス、草木灰など数種を積み込む方法があります。前者は、そのつど出る野菜くずを臭いが出る前の新しいうちに、市販されているコンポスターか、畑のすみに随時、満杯になるまで積み込みます。畑に用意する堆積場は直径四十センチ、深さ二十センチの穴を掘り、ここに材料を入れ、同量の土の上に乗せます。土には脱臭効果がありますから材料を覆えば臭いは出ず、小バエの発生も防げます。四週目に入るところからとさおり切り返し、高さ三十七センチ前後で積み込みを終了します。新たな材料の積み込みは別に堆積場を用意し、同じように行います。

トウモロコシや収穫後の夏野菜の茎葉、雑草を大量に積み込む場合は十一月ごろ、日当たりのよい場所に、五坪の畑なら一メートル四方の堆積場を用意し、材料を交互に、サンドイッチ状に土をはさみ、水を打ちながら一メートル五十センチほどの高さに積み上げます。積み終えたらシートなどで覆うと発酵が促進し、堆積一週間後には分解による発酵熱で内部の温度が五十〜七十度上がります。積み込み一カ月後から二〜三回切り返しをしていくと、翌年五月には材料はあとかたもなく消えて黒々とした団粒土が誕生します。積み込み作業は楽しく、材料が数カ月で消える不思議さは子どもにとってもおどろきであるにちがいません。

(イラストレーター イラストも筆者)

